# 想

金田（かなた） 晉（すすむ）

## 月の暦とエネルギー

仕事にもレジャーにも家庭生活にも、暦が必要だ。歴史を学ぶには、暦はもっと必要だ。

だが私たちが使っている暦は1582年ローマ教皇グレゴリウス13世が制定したグレゴリオ暦（太陽暦）である。為政者の第一の仕事が時間の支配だとすれば、私たちは知らないうちにカトリック教徒にされている。

東アジアでは月が大切だ。人々は生活の中で月を愛した。この国の文学や美術、歴史、社会生活、風習に親しもうとすれば祖先の、月を太陽とともに大切にした暦、太陰太陽暦も大事にしたい。東アジアの暦法は中国の古代王朝に始まる。だが遠く古代メソポタミアとも通じていた。それは古代、世界暦だった。

この暦が日本列島に伝来したのは6世紀。その頃この国の文学や美術も興った。春の若菜を摘み、秋の収穫を祝い、人との出会いと別れを歌った。およそ1200年続いた。江戸時代には日本を基準とする、世界史上太陰太陽暦として最も精確（せいかく）とされる天保暦も生まれた。

明治政府はこれを廃暦としグレゴリオ暦（1872年改暦）を公式暦（「西暦」）としたが、天保暦も旧暦と呼ばれ今も農業や漁業、伝統芸能の分野で生きている。東アジアでは韓国や中国、ベトナムでこの暦は健在である。私はこの暦に美学の方面から関心を寄せ、月暦の大切さを提唱してきた。だが今、それを超え近未来的な関心も強くしている。月は未来のエネルギーのカギを握るのではないか。

この国では太陽光発電ばかり喧伝（けんでん）されている。だがこれは夜も天候不順の日もダメ。一方、月のエネルギーはいつも働いている。潮の干満は1日2回（ほぼ）ある。フランスや北欧では潮汐（ちょうせき）発電が実用化している。韓国では既に10年前、世界最大の始華湖潮力発電所が始動した。その年、日本では東日本大震災があり大津波が押し寄せた。福島原発が壊滅し安全神話が吹っ飛んだ。

四周、干満差の激しい海に囲まれる日本で、どうして潮汐発電が本格的にならないのか。科学技術、頑張れ、と言いたい。

（東亜大特任教授、広島大名誉教授）